翻訳という作業

——ワイルド翻訳史へのプロローグとして——

西村孝次
（日本ワイルド協会名誉顧問）

いささか翻訳という作業にたずさわってきた者のひとりとして，わたしは翻訳ということを考えようとするとき，まず頭に浮かぶのは‘Traduttore é traditore’（翻訳者は裏切り者）というイタリアのことわざである。つまり多かれ少なかれ翻訳者は原作者の真意を裏切るか，または裏切るまいとしても結果は裏切ることになってしまう。この避けがたい悲しい実情を，しっかり腹に収めて翻訳のペンをとろうとしないような者は，おそらくプロの翻訳家とはなりえないであろう。

さまざまな訳がある。たとえば名訳，正訳，誤訳，悪訳，それに最近は超訳まで出てきて，まさに翻訳大国・日本は花盛り。ザ・ビートルズの‘Norwegian Wood’は「ノルウェーの木材，もしくは家具調度）だが，これを‘Norwegian Woods’と解して，ある作家が「ノルウェーの森」として大いに売ったのは故意か，それとも笑うべき錯覚なのか？

ところで正訳が誤訳や悪訳にまさるのはいうまでもないとして，ときにはある種の悪訳が一種のあらがいがたい魅力に富む場合も少なくない。そこが翻訳のむずかしさであり面白いところでもある。このことを，もしアーサー・シモンズの『象徴派の文学運動』を岩野泡鳴（1913年）と前川祐一教授の訳（1993年）で読みくらべるならば，おのずから会得されるであろう。いうところの蓼食う虫も好き好きかもしれぬが要はどちらが著者の精神の息吹とリズムを捉えているか，そしてその把握と表現とが読者にどのような感動や衝撃を与えたか——そこにこそ，あらゆる翻訳論の骨子が存するといえるのだ。

これを近代ヨーロッパにおいてもっとも決定的な形で示したのが，ボードレールのポウ訳であった。ここに詳しくその過程をたどるゆとりはないが，それは要約すればボードレールにとってポウをフランス語に移植することは自己の発見とフランス詩人としての誕生にほかならなかった。そして，この極めて個人的な体験のレアリテ（現実性，なまなましさ）が，ひとつの強くて広い社会的浸透力となって読む者に伝わってくるのである。これ以上の価値と栄光が翻訳および翻訳者に望みうるであろうか？　なお，これらの現象について，わたしは『英語青年』1993年11月号において触れるところがあった。また，ヴァルター・ベンヤミン『暴力批判論』（岩波文庫）「翻訳者の課題」は極めて示唆的であり，併せてお読みいただければ，おたしの幸福はこれに如くものはない。（1994年4月2日）